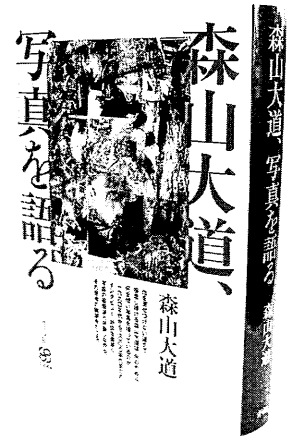


書評

森山大道著
『森山大道、写真を語る』

青弓社 2009年3月14日 第1刷
定価3000円+税

建築・デザイン学科
工藤 卓



このごろ、街の景観デザインのことを考える機会が多くなっている。言うまでもなく、景観は自然と人工物と人の暮らしの組み合わせからなっている。その景観を、人々は文化として受け入れた不断の都市活動を続けている。振り返ってみれば、わたしが都市や建築の景観をデザインの問題として観察しはじめたのは、一九六〇年代後半から七〇年代はじめに過ごした学生時代のものである。その頃、中平卓馬や森山大道の写真是、建築デザインを学ぶわたしたち学生の都市の見方の先導役となっていた。「アサヒカメラ」や「デザイン」「朝日ジャーナル」などで見た粒子の荒れた白黒の「ブレ、ボケ」写真の迫力は、自分の理解を越えた強烈な映像印象であった。どの写真を憶えているというわけではないが、都市や路地が醸し出す表層や、道端に密かに息づくものの姿態を35ミリカメラで一瞬に露出させた動的なショットがいまも視覚のフィルターにこびりついている。

さて、本書『森山大道、写真を語る』は、一九九〇年から二〇〇〇年までのインタビュー・対談と、白黒写真が交互に挟み込まれた四四〇ページが濃密に展開されていくという編集もおもしろい。異なる時空間で異なる対談者と語られる対話ページと、縦アングルは左ページに、横アングルは見開きページにレイアウトされた、どちらかといえば黒の調子が勝る森山の写真が重厚なリズムで響きあい、単なる写真集とも、いわゆるカット写真入りの対談集とも違う異彩なところよさがある。

第1部の「語る」は、インタビューアと対話する8編で編成され、「ぼくの写真

は日常を撮るだけ。物語にはいかないよ、絶対に」、「ぼくの皮膚と街の皮膚、その一瞬のすれ違いがおもしろくてしようがない。」等々と、森山大道の写真家の思考を明らかにしていく。「code name: DAIDO」では、「写真って何だろう、どうしておれ写真を撮ってるんだろう、という素朴な疑問に突き動かされて手を変え形を変えながら、あれこれ引きずってきたような気がする。」とデビューした六〇年代の時代の雰囲気言葉を語る。とりわけ、「路上というのはミュージアムだし、シアターだし、ライブラリーだし、ステージみたいなものだ。」と語るくだりは、ひたすら路上の景観を見たままの真実として繋ぎ止めようとする写真家のスタンスが伝わってくる。そして対話のページと交互に織りなす写真からは、まじまじと見るにはちよつと気が引けるような、それでいて凝視しないと真実の都市の壁を見せてもらえないような、ある種の不安と安堵を読み取ってしまう。

第2部の「語り合う」は、荒木経惟、中平卓馬、井坂洋子、ホンマタカシ、吉田修一、田中長徳らと、森山大道の獨創性と創造性について、まさに語り合っている。すべてが写真の核心を突くエキサイティングな対話であるが、盟友荒木経惟との語り合いは、お互いを認め、ともに写真の革新を闘って最高の地点に達した写真家を語り尽くして興味が尽きない。

森山大道も荒木経惟も、デビューして四〇年以上、都市と人間を鮮烈に撮り続けていた。そのふたりが森山大道写真集『Daido』を巡って、荒木が「写真の肌、街の肌、皮膚とかね、なんかさういふものが、写っちゃってるんだね。」「この「Daido」って、ラストシーンがないんだよね。言い換えれば、どれもこれもラストシーンであるし、どれもファーストシーンとも言える。そこがいいんだよね。」と語る。続いて、『デジタルカメラの「明るい部屋」』では、森山が「おれらしくもなく被写界深度とか感覚しちゃうわけ。むちゃくちゃ深いじゃない。で、わあーと寄れるし、引けるわけだから、その瞬間に写らない何かがちよつと見えたりね。写真のこととは違うんだけど気になる。その一瞬がさ。」とデジタル論を切り出せば、荒木が「じゃ、そうだ。『空の間』だ。デジタルは空間。うちらは『時の間』。時空だからさ。な?」、森山「そう。確かな時間感覚がない。」とさらけ出す。何だか、写真のプロたちがこんな風に自作の造形を語りあえる幸せがあるんだなど、小声でつぶやきたくなる。写真と言葉はお互い別の表現であるが、同じ時代で同じ写真思想を共有する闘士たちならではの言葉が魅力だ。

もっと聴いていたい、何度もページを繰っていたい一冊である。

《追記》長年の課題を仕上げたとたん、私は4月、保護課から高齢者介護課介護予防係へ異動となった。「筑豊と生活保護」は、私自身のライフワークという思いでいるため、どこの職場へ行っても視点をかえて取り組んでいきたいと考えている。異動先もまた、その人らしく地域で生活したいという暮らしの現場を介護予防という視点から市民に寄り添い、後押ししていくセクションである。私にとっては一つ引き出しが増える。この中にたくさん感じたもの、考えたものを詰め込み、時には虫干しを兼ねてみなさんにご報告の機会を得たい気持ちでいっぱいだ。